



Title	地域類型論的観点から見たサハリン地域に分布するウイльта語、アイヌ語、ニヴフ語の定動詞における3人称標示と複数接辞の文法的類似性について
Author(s)	白, 尚燁
Citation	北方言語研究, 11, 69-79
Issue Date	2021-03-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/80945
Type	bulletin (article)
File Information	NoLS11_03_069_SangyubBAEK.pdf



[Instructions for use](#)

地域類型論的観点から見たサハリン地域に分布するウイльта語、アイヌ語、ニヴフ語の定動詞における3人称標示と複数接辞の文法的類似性について¹

白 尚 燁
(室蘭工業大学)

キーワード：地域類型論、ウイльта語、サハリンアイヌ語、ニヴフ語、3人称標示

0. はじめに

白 (2016) は、ツングース諸語²の定動詞直説法における3人称標示(数の対立)が地理的分布によって異なることを示し、同現象が周辺言語との接触に起因する可能性を提起した。本稿は、この先行研究を踏まえ、サハリン地域に分布し、系統関係が異なるとされるウイльта語(ツングース諸語)、アイヌ語(孤立言語)、ニヴフ語(孤立言語)の定動詞における3人称標示と3人称複数主語の標識として用いられ得る複数接辞の文法的類似性を示すことを目的とする。その結論として、サハリン地域のウイльта語、アイヌ語、ニヴフ語においても、周辺ツングース諸語の定動詞に見られる3人称標示の地域類型論的特徴(任意的対立型)が観察されると同時に、3人称複数主語の標識として機能することができる複数接辞が動詞にも名詞にも付加される文法的特徴においては、サハリンに限った地域的特異性が見られることを提示する。

1. 先行研究

白 (2016) では、表1と図1のとおり、ツングース諸語の定動詞に現れる3人称単数主語と3人称複数主語の人称標示における数の対立が、各言語の地理的分布によって北ツングース諸語(義務的対立型)、東ツングース諸語(任意的対立型)、南ツングース諸語1(非対立型)、南ツングース諸語2(人称非標示型)の順に異なる分布が見られることを示した。なお、この4パターンに分かれるツングース諸語は、それぞれの周辺言語であるコリマ・ユカギール語、ロシア語、チュルク諸語(サハ語、カザフ語、ウイグル語)、モ

¹ 本稿は、Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization (国立国語研究所, Aug. 5-8, 2018) で発表した“Ainu and Tungusic from the perspective of linguistic typology and areal linguistics”と2020年韓国アルタイ学会全国学術大会—アルタイ言語と文化の類別と分別—(2020年12月5日) で発表した“Jiyeogyuhyeongronjeok kwanjeomeseo bon Sahallin Uiltaeo, Nibeuhueo, Ainueoui jeongdongsa 3inchingpyosi [=地域類型論的観点から見たサハリンのウイльта語、ニヴフ語、アイヌ語の定動詞3人称標示]”をもとに、修正・加筆を行ったものである。これら研究集会で有意義な助言をくださった先生方に感謝を申し上げます。なお、本研究はKAKENHI 19k23066「ツングース語族における地域的分布と類型論的相違の相関性について」、AA研共同利用・共同研究課題「アルタイ型」言語に関する類型的研究(2)」、AA研共同利用・共同研究課題「モンゴル諸語の言語変容—外的要因と内的要因—」の成果である。

² 本稿におけるツングース諸語の系統的分類は、下記のIkegami (1974) にしたがう。但し、ホジェン語に関しては、風間 (1996) にもとづく。

第I群：エウエンキー語(Ek), エウエン語(E), ネギダル語(N), ソロン語(S)

第II群：ウデヘ語(U), オロチ語(Oc), ホジェン語(Hz)

第III群：ナーナイ語(Nn), ウルチャ語(Ol), ウイльта語(Ut)

第IV群：満洲語(M)

Ikegami (1974)

ンゴル諸語（ブリヤート語、ダグール語、ハルハ・モンゴル語）、中国語における定動詞3人称単数と複数の人称標示における数の対立と類似していることが確認できた。この研究成果に基づき、筆者はツングース諸語に各言語の地理的分布によって異なる定動詞の3人称標示現象が見られ、この相違が周辺言語と共通していることから、周辺言語による影響である可能性を提起した。しかし、同研究では、サハリンで話される言語としてウイльта語のみを扱っており、アイヌ語とニヅフ語に関しては、研究の対象としていない。

表1. ツングース諸語と周辺言語の定動詞における3人称標示³（白 2016 に基づき、筆者作成）

	3SG	3PL	数対立		3SG	3PL	数対立	
北: Evenki	-n	- \emptyset	義務的対立型	北 ↑ ↓ 南	Kolima Yukaghir	-m	- <i>ŋaa</i>	義務的対立型
北: Even	-n	(-r)	義務的対立型		Sakha	-Ar	-Al-lAr	義務的対立型
北: Negidal	-n	- \emptyset	義務的対立型		Russian	-et/it	-yut/-yat	義務的対立型
東: Ulcha	- \emptyset	(-l)	任意的対立型		Buriat	- \emptyset	(-d)	任意的対立型
東: Nanay	- \emptyset	(-l)	任意的対立型		Dagur	- \emptyset	(-sul)	任意的対立型
東: Uilta	- \emptyset	(-l)	任意的対立型		Kazakh	(-di)	(-di)	非対立型
東: Udehe	- \emptyset	(-du)	任意的対立型		Uyghur	(-du)	(-du)	非対立型
南 1: Solon	-n	-n	非対立型		Chinese	-	-	人称非標示型
南 1: Hezhen	(-n)	(-n)	非対立型		Khalkha	-	-	人称非標示型
南 2: Manchu	-	-	人称非標示型					

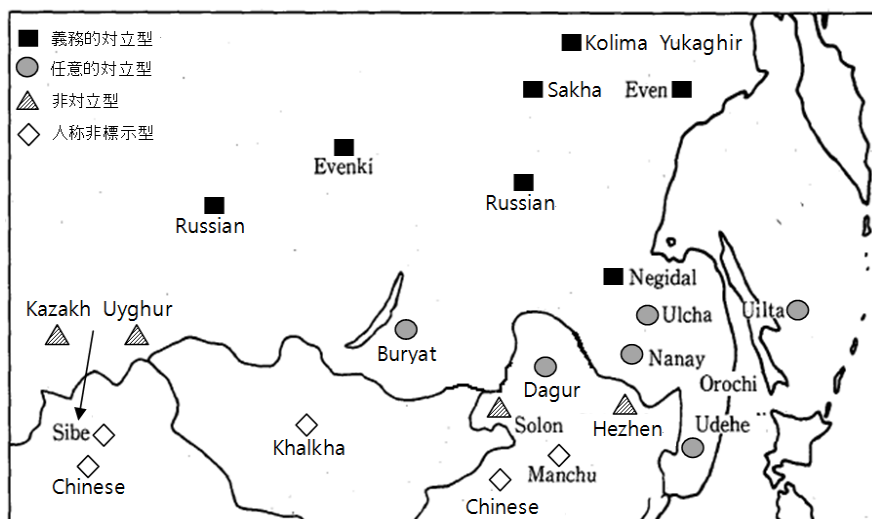


図1. ツングース諸語と周辺言語の定動詞における3人称標示（白 2016: 62）

³ 表1のコリマ・ユカギール語、サハ語における3人称単数と複数の人称標示は、紙面の制約で、定動詞における3人称体系の一部を示したものである。詳しくは白 (2016) を参照されたい。

2. ウイльта語、アイヌ語、ニヴフ語の定動詞における3人称標示と複数接辞の文法的特徴⁴

第2節では、サハリン地域に分布するウイльта語、アイヌ語、ニヴフ語の定動詞における3人称標示と3人称複数主語標識として用いられ得る複数接辞の文法的特徴について検討する。本節における類型論的パラメータとして、1)定動詞に付加される3人称標示の数対立(図2-1)と2)複数接辞の文法的特徴(図2-2)を採用する。前者のパラメータは、3人称単数主語と複数主語標示において、数の対立が常に区別される場合は義務的対立型、選択的に区別される場合は任意的対立型、区別されない場合は非対立型、人称標識が存在しない場合は人称非標示型の4タイプに分かれる。後者のパラメータは、パラメータ1)と関係すると考えられるこれら3言語の複数接辞が動詞と名詞に用いられるか、用いられる場合、動詞では3人称複数主語標示の文法機能があるか、名詞では複数標識としての文法機能があるかについて検討する。

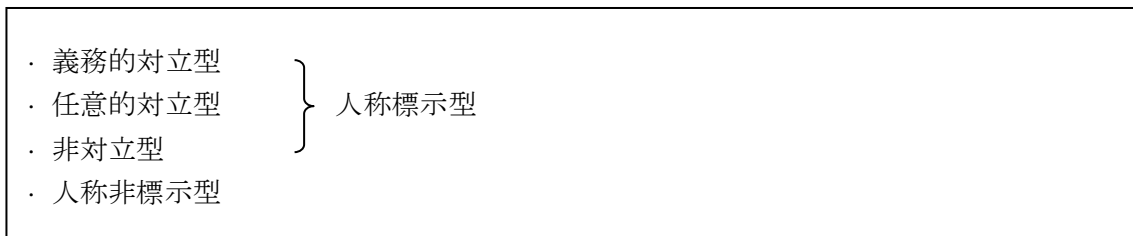


図2-1. パラメータ1) 3人称標示の数対立

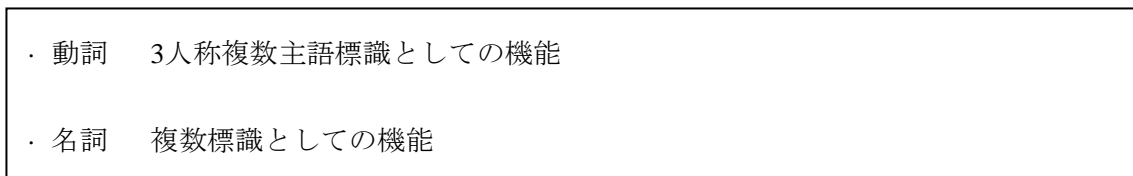


図2-2. パラメータ2) 複数接辞の文法機能

2.1. ウイльта語⁵

ウイльта語は、表1で示したように、定動詞に付加される3人称単数と複数主語の標識はともにゼロ形態素で現れるが、3人称複数標示に複数接辞 *-l* が選択的に用いられる任意的対立型の言語である(山田(2013: 96)と用例1)-3)参照)。この複数形式は、用例4)のように、名詞にも付き、複数を示す文法機能がある。ウイльта語は、ツングース諸語のうち、ナーナイ語とウルチャ語と第Ⅲ群に属し、これらの言語と系統的に最も近いと見なされる(注2参照)。ナーナイ語とウルチャ語においても、複数接辞 *-l* は見られ、表1のとおり、ウイльта語と同じく、定動詞に3人称複数主語を示す選択的な標識として使用されるが、

⁴ 本稿におけるウイльта語、アイヌ語、ニヴフ語の表記、グロス分析、和訳は、筆者の方針によって変更したところがあるため、原典と異なることがある。

⁵ ウイльта語は、北方言と南方言に分かれるが、本研究が扱う内容に関しては、方言差がないと考えられるため、本稿では区分しない。

同形式はもはや名詞複数接辞としての機能はない（表2参照）。この点において、ウイльта語は第III群のツングース諸語として特異性を持つと言える。「ツングース諸語では基本的に名詞につく複数接辞と動詞につく複数接辞は異なっている」という風間 (2009: 128) に従えば、ウイльта語の複数接辞 *-l*に見られる上記の文法的特徴は、ツングース諸語全体としても特異な現象として位置づけられる。

動詞

・3人称単数主語

- 1) *əri duxu gəəm taullillaa-ø.*
 this house all get.burned+FUT-3SG
 「このいえは全部火事でやけるだろう。」

(池上 2002: 3)

・3人称複数主語

- 2) *sumbeepə waa-rillaa-ø sugdəækki nari-sal unji-ni.*
 2PL.ACC kill-FUT-3PL sloppy person-PL say.PTCP.PRS-3SG
 「あんたらを殺すでしょう、ならず者らがと言う。」
jə-du. sumbeepə waa-rillaa-l.
 this-DAT 2PL.ACC kill-FUT-PL
 「ここで。あんたらを殺すでしょう。」

(池上 2002: 133)

- 3) *sinjeellaa-l tari nari-sal.*
 come+FUT-PL that person-PL
 「やつらは来るでしょう、あの人ら。」

(池上 2002: 134)

名詞

- 4) *nari-l* 「人たち」
 person-PL
ulaa-l 「トナカイたち」
 reindeer-PL
buwaata-l 「島（複数）」
 island-PL

(Tsumagari 2009: 6)

表2. 第III群ツングース諸語の定動詞における3人称接辞と複数接辞-*l*の文法機能

		ナーナイ語	ウルチャ語	ウイльта語
3人称標示の数対立		任意的対立型	任意的対立型	任意的対立型
複数接辞- <i>l</i>	動詞：3PL 主語標示	+	+	+
	名詞：複数標示	非該当	非該当	+

2.2. アイヌ語

アイヌ語は、大きくサハリンアイヌ語、千島アイヌ語、北海道アイヌ語の3つの方言に分かれる。サハリンアイヌ語の定動詞⁶では、表3のように、3人称単数主語でも複数主語でもゼロ形態素が人称標識として現れるが、サハリンアイヌ語にも、動詞にも名詞にも用いられる複数接辞 *-(a)hci(n)* が存在する。動詞に用いられる場合は、*-(a)hci*⁷の形で現れるが、村崎 (1979: 49) はこの形式を3人称複数主語又は目的語を示す任意的3人称複数接辞として記述している⁸。アイヌ語の人称接辞は、接頭辞として現れるが一般的であることを考えると、接尾辞形式による3人称複数標示は特異な現象として見なされる。5)-8)は、これと関連する用例で、表3に基づいて筆者がグロス分析を行った。この記述に従うと、サハリンアイヌ語も、ウイльта語と同様に、任意的対立型の3人称標示言語として分類される。一方、名詞には、9)のように、所属形の複数標識として *-(a)hcin*の形で用いられる。

表3. サハリンアイヌ語の主格人称接辞⁹ (村崎1979: 49)

人称	単数	複数
1	ku-	'an-, -'an
2	'e-	'eci-
3	∅(-:筆者補充)	∅… (-hci)

⁶ 厳密にいうと、アイヌ語には定動詞という動詞分類が適切ではないかもしれない。アイヌ語においては、動詞述語として機能する動詞を定動詞と見なす。

⁷ 北海道方言に属する胆振地域のアイヌ語にも、*-(a)hci* と対応する形式であると考えられる複数接辞 *-ci* がある (金田一・知里 (1936: 66), 佐藤 (2008: 5))。

⁸ 一方、服部 (1961: 18) では、*-(a)hci* が3人称複数主語に用いられる際、義務的な要素として判断しているが、管見の限り、このような記述は他には見られない。なお、上記のように、これに反する記述と用例が確認できる。知里 (1972: 494-495, 498) と Shibatani (1990: 54) でも3人称複数標識として扱っていないが、いずれも任意の形式として認めている。

⁹ 村崎 (1979: 51-52, 2006: 64) では、*-(a)hci* が基本的に「若ことば」でも「老人ことば」でも3人称複数主語又は目的語を示す人称接辞であることを認めながら、この形式が「老人ことば」では、3人称複数以外の1人称複数代名詞と2人称複数代名詞のときでも「みんな一緒に~する」という意味で用いられると指摘している。村崎 (1979: 52) によると、これらの1人称複数代名詞 (*'anokayahcin*)と2人称複数代名詞 (*'eci'okayahcin*)は、中年以上の人が良く使う人称代名詞であるという。

動詞

・3人称単数主語

- 5) *tara pon mahtekuh 'eh.*
that small girl come.3SG
「あのお嬢さんが来た。」

(村崎 1979: 24)

・3人称複数

- 6) *taa nay ohta reekoh hemoy ka usaan ceh renkayne ahun.*
this river into many herring too various fish a.lot enter.3PL
「この川に多くのマスもいろんな魚もたくさん入った。」

(Shibatani 1990: 54)

- 7) *reekoh orohko okay.*
many Orokkos be(PL).3PL
「多くのオロッコ族がいた。」

(Shibatani 1990: 53)

- 8) *orohko-utah¹⁰ ariki-hci.*
Orokko-PL come(PL)-3PL
「オロッコ族たちが来た。」

(Shibatani 1990: 53)

名詞

- 9) *'eci-seta-ha-hcin* 「お前たちの犬ども」
2PL-dog-POS-PL
ku-mic-ih-hcin 「私の孫たち」
1SG-grandson-POS-PL

(村崎 1979: 85)

2.3. ニヴフ語

Gruzdeva (1999) では、アムール方言、北サハリン方言、東サハリン方言、南サハリン方言の4つに分けて記述している。ニヴフ語にも、下記のGruzdeva (1999: 33) によると、アムール方言¹¹、東サハリン方言、北サハリン方言では、名詞複数接辞 *-gu(n)* と同じ形式が定動詞に選択的に用いられるという。3人称単数と複数主語の文だけを見ると、同形式が定動詞の直後に付加され、任意的に3人称複数主語の標識として機能するという解釈ができる¹²。10)-12) は、これと関連する東サハリン方言の用例である。南サハリン方言

¹⁰ 村崎 (1979: 85) では、複数接辞 *-(a)hcin* がある人 (または物) に所属しているものの複数形として用いられるが、もう1つの複数接辞 *'utah~'utara, 'oy* は所属していないものの多数・複数を示すときに用いられると区別している。一方、坂口 (2020) では、前者が同質複数のみを示すのに対し、後者は同質複数と近似複数の両方を示すことができると論じている。

¹¹ アムール方言に関する具体的な記述と用例は、Nedjalkov & Otaina (2013: 49) を参照されたい。

¹² ニヴフ語の定動詞 *-d* には、人称が標示されることはないため、白 (2016) にしたがうと、ニヴフ語は人称非標示型として分類されるべきである。しかし、3人称単数と複数主語の文に限定して考えれば、複数接辞が3人称複数主語の標識として機能するという見方も可能である。

(ポロナイスク)に関する高橋 (1942: 49)でも、「動詞の複数を表すには、名詞の複数を作る時と同様に、不定法の形に *-kun*, *-χun* をつける。しかし意味さへ通じればなるべく省略するのが普通である」という記述から同じ状況であると考えられる¹³。なお、この複数形式は、ニヴフ語の方言差と関係なく、名詞の複数標識 (東サハリン方言13) としても用いられる。

A plural subject is optionally coded in the finite verb by the suffix <AD(Amur dialect: 筆者注)> *-ku/-yu/-gu/-xu*, <ESD(East Sakhalin dialect: 筆者注)> *-kun/-χun/-gun/-xun*, <ESD(East Sakhalin dialect: 筆者注), NSD(North Sakhalin dialect: 筆者注)> *-kunu/-χunu/-gunu/-xunu*, which is identical to the noun plural suffix...

(Gruzdeva 1998: 33)

東サハリン方言

動詞

・3人称単数主語

- 10) *č̣χar mi xeřq̣η-ux osq če-d.*
forest in side-LOC/ABL hare cry-FIN
「森の中で野兎が泣いた。」

(Gruzdeva 1998: 63)

・3人称複数主語

- 11) *Tymy yeřq̣η-ux n'iyṿη meṇη čma-d.*
Tymy side-LOC/ABL man two go.out-FIN
Ket xeřq̣η-doχ vi-ivu-d-χun.
Ket side-DAT/ADD go-PROG-FIN-PL
「Tymyのほうから二人が出た。彼らはKetのほうへ行っていた。」

(Gruzdeva 1998: 62)

- 12-1) *qan-gun ve-d.*¹⁴
dog-PL go-FIN
「犬 (複数) が通った。」

- 12-2) *qan-gun ve-d-χun.*
dog-PL go-FIN-PL
「犬 (複数) が通った。」

(丹菊 2012: 116)

¹³ 但し、南サハリン方言では動詞に複数接辞が用いられる際には目的語の複数性を示す場合もあるという点において、ニヴフ語の他方言と異なる (高橋 (1942: 49) 参照)。丹菊 (2012) は、南サハリン方言におけるこの特異性がサハリンアイヌ語からの影響である可能性を指摘した。

¹⁴ 丹菊 (2012: 115) は、Gruzdeva (1998: 64) の用例13)と違って、いくつかの名詞の語末の *η* に接尾辞が付く際、*η* は脱落すると記述している (上記12-1), 12-2)と13)参照)。

名詞

- 13) *n'iyvŋ-yun* 「人たち」
 man-PL
qanŋ-gun 「犬たち」
 dog-PL

(Gruzdeva 1998: 64)

3. おわりに

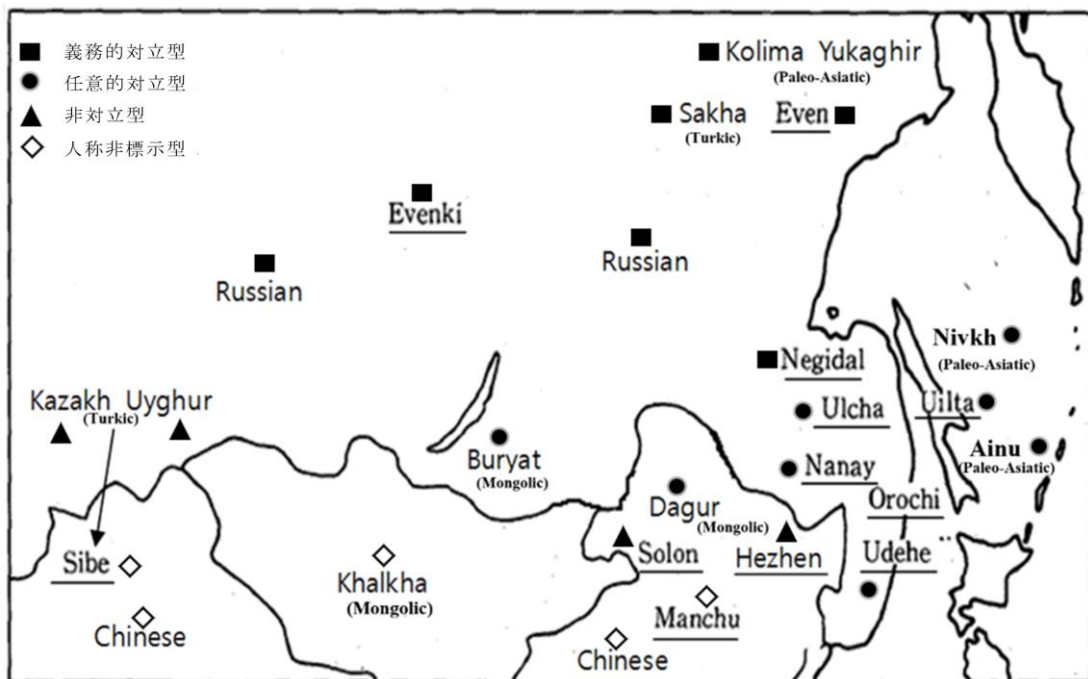


図3. ツングース諸語と周辺言語の定動詞における3人称標示

本稿は、白 (2016) に基づき、サハリン地域に分布するウイльта語、アイヌ語、ニヴフ語の定動詞における3人称主語標示の数対立と3人称複数標識として機能する複数接辞の文法的特徴について考察を行った。その結果、これらの言語は共通して複数接辞を用いて3人称複数主語を示し得る任意的対立型として分類できるということが分かった。これに基づき、白 (2016) の研究成果と関連付けると、図3で示すように、サハリンに分布するこの3言語においても、隣接するツングース諸語の定動詞における任意的対立型の類型論的特徴と類似した現象が確認できる。また、サハリン地域の3言語は、3人称複数主語の標識として用いられる複数形式が名詞にも付加されることにおいても同じである。表4のとおり、系統関係が想定できない3言語において、複数接辞が動詞にも名詞にも同様に付加され、定動詞に付加される際には3人称複数主語を示し、名詞には複数接辞として機能する

文法的類似性が見られることは興味深い¹⁵。ウイльта語における同現象は、ツングース諸語のうち、ウイльта語ともっとも系統関係が近いとされる第III群のナーナイ語とウルチャ語においては、対応する複数形式が定動詞の3人称複数主語のみに現れ、名詞複数標識としては使われない。以上のことから、サハリンのウイльта語、アイヌ語、ニヴフ語の定動詞における3人称主語標示は、隣接するツングース諸語における3人称主語標示の類型論的特徴と重なる地理的特徴が見られる。同時に、複数形式の文法的特徴においては、サハリン地域に限っての文法的特異性が観察される¹⁶。

表4. 第III群ツングース諸語とサハリンアイヌ語、ニヴフ語の定動詞における3人称標示と複数接辞の文法機能

		ナーナイ語(III) ウルチャ語(III)	ウイльта語(III)	サハリン アイヌ語	ニヴフ語
3人称標示の数対立		任意的対立型	任意的対立型	任意的対立型	任意的対立型
複数 接 辞	動詞：3PL 主語標示	+	+	+	+
	名詞：複数標示	非該当	+	+	+

しかし、本稿はサハリンに分布するもう1つのツングース諸語であるエウエンキー語に関しては、関連資料が不足していることから、研究の対象としていない。これに関しては、今後の課題としたい。

略号一覧

1, 2, 3: 1st person, 2nd person, 3rd person, ABL: ablative, ACC: accusative, ADD: additive, DAT: dative, FIN: finite, FUT: future, LOC: locative, PL: plural, POS: possessive, PROG: progressive, PRS: present, PTCP: participle, SG: singular, -: 接辞境界, +: 融合.

謝辞

本稿の改正に当たり、査読者の先生方に非常に有意義なご指摘やコメントをいただき、ここに深く感謝を申し上げたい。査読者の先生方のご助言が十分反映されなかったことが懸念されるが、それはすべて筆者の力不足によるものである。当然ながら、本稿におけるいかなる誤りも筆者に帰するものである。

¹⁵ 但し、サハリンアイヌ語とニヴフ語の南サハリン方言の複数接辞に見られる目的語の複数性を示す点、サハリンアイヌ語の「老人ことば」とニヴフ語の複数接辞が3人称複数主語だけではなく1人称・2人称複数主語の文にも用いられる点においては、サハリンの3言語の間に差異が見られる。

¹⁶ 同現象は、これら3言語の間における言語接触現象に注目し、サハリンを言語地域 (linguistic area) として見なす先行研究Gruzdeva (1996), 津曲 (2009), Yamada (2010) ともつながる結果であると考えられる。

参考文献

- 白尚燁 (2016) 「地域類型論的観点から見たツングース諸語の定動詞における3人称標示—数の対立を中心に—」 『北方言語研究』 6: 53-71.
- 知里真志保 (1972) 「アイヌ語法研究—樺太方言を中心として—」 『知里真志保著作集』 3: 456-586, 東京: 平凡社.
- Ikegami, Jiro (1974) “Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprache. *Sprache, Geschichte und Kultur der Altaischen Völker, Protokollband der XII. Tagung der Permanent international Altaische Conference 1969 in Berlin*: 271-272, Berlin: Akademie Verlag.
- 池上二良 (2002) 『ウイルトア口頭文芸原文集』 (ELPR publication series: A2-013, ツングース言語文化論集 16) 吹田: 大阪学院大学情報学部.
- Gruzdeva, Ekaterina (1996) The Linguistic Situation on Sakhalin Island. In: S. A. Wurm, P. Mühlhäusler, D. T. Tryon (eds.) *Atlas of Languages of Intercultural Communication in the Pacific, Asia, and Americas*. Vol. 3: 1007-1012, Berlin/ New York: Mouton de Gruyter.
- Gruzdeva, Ekaterina (1998) *Nivkh*. München/Newcastle: Lincom Europa.
- 服部四郎 (1961) 「アイヌ語カラフト方言の『人称接辞』について」 『言語研究』 39: 1-20.
- 風間伸次郎 (1996) 「ヘジェン語の系統的的位置について」 『言語研究』 109, 117-139.
- 風間伸次郎 (2009) 「ニブフ語と近隣諸言語との類型的異同・言語接触について」 『サハリンの言語世界: 北大文学研究科公開シンポジウム報告書』: 127-144.
- 金田一京助・知里真志保 (1936) 『アイヌ語法概説』 東京: 岩波書店.
- 村崎恭子 (1979) 『カラフトアイヌ語—文法篇—』 東京: 国書刊行会.
- 村崎恭子 (2006) 「樺太アイヌ語における複数を表す人称接辞-(a)hciについて」 『日本言語学会第133回大会予稿集』: 59-64.
- Nedjalkov, V. P. and G. A. Otaina (2013) *A Syntax of the Nivkh Language: The Amur dialect*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 阪口諒 (2020) 「アイヌ語樺太方言における名詞複数接尾辞:-ahcin の用法」 『北方人文研究』 13: 1-19.
- 佐藤知己 (2008) 「伊達地方のアイヌ語方言の言語的特徴」 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 14: 1-54.
- Shibatani, Masayoshi (1990) *The Languages of Japan (Cambridge Language Surveys)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 高橋盛孝 (1942) 『樺太ギリヤク語』 大阪: 朝日新聞社.
- 丹菊逸治 (2012) 「ニブフ語の複数表示—ポロナイスク方言の-gunの特殊用法」 『北方人文研究』 5: 113-122.
- Tsumagari, Toshiro (2009) Grammatical outline of Uilta (Revised). *Journal of the Graduate School of Letters* 4: 1-21.
- 津曲敏郎 (2009) 「サハリンの言語世界: 単語借用から見る」 『サハリンの言語世界: 北大文学研究科公開シンポジウム報告書』: 1-10.
- Yamada, Yoshiko (2010) A preliminary study of language contacts around Uilta on Sakhalin. *Journal of the Center for Northern humanities* 3: 59-75.

山田祥子 (2013) 『ウイльта語北方言の文法と言語接触に関する研究』 【博士論文】 札幌：北海道大学大学院文学研究科.

3rd Person Marking on Finite Verbs and Grammatical Features of Plural Suffixes in Uilta, Ainu and Nivkh in Sakhalin from the Perspective of Areal Typology

Sangyub BAEK

(Muroran Institute of Technology)

This study aims to examine number distinction of third person marking on the finite indicative forms and grammatical features of plural suffixes employed as third person plural subject marker in Uilta, Ainu and Nivkh in Sakhalin from the perspective of areal typology. Based on typological parameters of third person marking: (i) obligatorily distinct marking, (ii) optionally distinct marking, (iii) non-distinct marking, and (iv) non-person marking, Baek (2016) raised a possibility that the areal-based distinctions among third person marking on finite indicative forms in Tungusic possibly resulted from the influence from different adjacent languages. However, this study only includes Uilta among languages distributed on Sakhalin.

Accordingly, this research concentrates on number distinction of third person marking on finite verb endings and grammatical features of plural markers used as third person plural subject marker in Uilta, Ainu and Nivkh. These 3 languages can be classified as optionally distinct marking type. In addition, they have in common that plural suffixes both added to finite verb and noun can mark third person plural subject on the finite verb endings. Nevertheless, it is remarkable that the use of plural suffix *-l* in noun as a plural marker is synchronically confirmed only in Uilta in opposition to other third group of Tungusic languages (Nanay and Ulcha).

In conclusion, this paper points out that Uilta, Ainu and Nivkh in Sakhalin possess areal typological feature as optionally distinct marking type, as in neighboring Tungusic languages on the continent. Simultaneously, as languages spoken in Sakhalin, they share a peculiarity in the grammatical function of plural suffixes to be attached to noun unlike adjacent Tungusic languages.

(ベック・サンヤップ iyairaykere@hotmail.co.jp)